



のと海洋ふれあいセンターだより

の と かい ちゅう りん
能 登 の 海 中 林

NEWS LETTER OF NOTO MARINE CENTER No. 35, Oct. 2011



九十九湾周辺で普通に見られるアカメバル(上)とホシササノハベラ(下)

<目次>

九十九湾にもいた新種?の魚達—図鑑は変わる・名前も変わる—	坂井 恵一	2
世界農業遺産認定の意義	谷内口孝治	4
穴水町新崎での里海の取組み	池森 貴彦	6
トピックス		7
センター誌抄と観察路だより		8

平成23年10月

九十九湾にもいた新種?の魚達—図鑑は変わる・名前も変わる—

坂井 恵一

日本産魚類の画期的図鑑の出版

今から約25年前の昭和59年(1984年)の暮れ、画期的な魚の図鑑が東海大学出版会から出版されました。日本産魚類大図鑑です。日本の川や湖はもちろん、沿岸と沖合、そして深海に生息する、それまでに見つかった全ての日本の魚約3400種が収録され、しかもほとんどの種類がカラー写真で紹介されたのです。

代表編者で水中写真家の益田一氏が集めたカラー写真を基に、当時、日本を代表する4人の魚類研究者が編者・執筆者となり、若手研究者を含む27人が執筆者として参加した図鑑だったのです。しかもこの図鑑、日本語と英語の解説書があり、図版との組み合わせで3種類の組み合わせで購入できることも話題を呼びました。

解説書には各種の和名と学名はもちろん、形態的・生態的特徴の他に成長に伴う行動の変化、最大の大きさ、そして分布域等が詳しく示されています。図版で紹介されたカラー写真はどれも色鮮やかで、いずれの魚も背ビレや臀ビレ、尾ビレ等が抜けられているので、その斑紋や色彩等の特徴が一目で判ります。さらに、オスとメス、幼魚や成魚といった成長段階、そして季節によって色彩や斑紋、形態が変化する種類には複数のカラー写真が使われていて、その違いもわかります。ある執筆者から「この図鑑に載っていないものは新種に間違いない」との言葉を聞いた覚えがあります。それほど各々の執筆者が、当時において把握していた全ての情報を整理し、真剣に取り組んだ図鑑だったのです。

その後の魚類研究の進展により、数多くの新種だけでなく、従来使われていた学名の変更や新しい和名の提唱がなされています。そのためここでは、九十九湾周辺においてスノーケリングで観察できる種類、また誰でもが釣りや磯観察で容易に見つけることができる魚の中で、学名(世界共通の名称)や和名(国内で使われる標準名称)が修正された種類を紹介したいと思います。

ノトイズミの発見

今から約25年前、私は七尾市能登島にある「の

とじま水族館」に勤務していました。そして、石川県の沿岸にどんな魚が生息しているかを調べるため、毎朝のように鰻目漁業協同組合(現石川県漁協ななか支所)の荷捌所に通い、主に定置網で漁獲される魚の観察を続けていました。そこで見つかったのがノトイズミです。

最初はイズミだと思い込んでいた魚の中に、体形や色彩が微妙に異なる3種類が混じっていることに気が付きました。そして、日本産魚類大図鑑で調べたところ、2種類はイズミとテンジクイサキに一致したのですが、残り1種はミナミイズミにとっても良く似ているものの鰓把(鰓にある櫛状の突起)の数が全く違っていたのです。研究を進めた結果、その魚は日本では知られていない種類だったので、ノトイズミという和名を提唱しました。ところが、学名はミナミイズミに使われていた学名を適用させるべきであることも分かりました。詳細は本誌No.20をご参照ください。

学名と和名が変わったササノハベラ

九十九湾周辺でも生息種が多い魚の中で、学名と和名が変わった魚もいます。先に紹介した魚類大図鑑ではベラ科の魚でササノハベラという名前で紹介されていたものの中に、実は2種類が混じっていることが判りました。馬淵浩司さん(現 東京大学大気海洋研究所)らの研究によりササノハベラはホシササノハベラとアカササノハベラの2種類に分けられました。

ホシササノハベラは背ビレの付け根に沿って白い斑紋が並ぶのが特徴で、新種として新しい学名も与えられました。日本海沿岸では青森県以南、太平洋沿岸では千葉県以南に分布します。一方、アカササノハベラは千葉県以南の太平洋沿岸だけに分布し、全身が赤っぽく、背に白い斑紋が現れることがないのが特徴で、学名は使われなくなっていたものが復活しました。太平洋沿岸の岩礁帯には両種が分布するのですが、外洋的などところにアカササノハベラ、内湾的などところにホシササノハベラが多いようです。

日本海に分布するのはホシササノハベラだけで、九十九湾周辺で磯釣りをすると、必ず釣れ

る魚の一つです。大型に成長したオスは青か緑、メスと幼魚は全身が赤っぽい体色をしています。馬淵さんは平成8年にのと海洋ふれあいセンターを訪れ、すぐ前の海でホシササノハベラを採集し、また当センターに保存されていた標本を使って研究を進めました。

3種類の分けられたメバル

次はメバルです。魚類大図鑑では1種類だけが紹介されています。能登ではメバル類のことをはじめと呼びますが、その理由は“眼が大きい”からか“味が良くて八味を感じる”からか定かではありません。実は能登島の鰻目の漁師さんたちはメバルを3種類に分けて区別していました。その呼び名はあかばちめとくろばちめ、そしてしらたばちめです。全身が鮮やかなオレンジか赤っぽい黄色色をしているのがあかばちめ、全身が真っ黒で背中がコブのように盛り上がるのがくろばちめ、そしてしらたばちめはやや深みに住む白っぽいのが特徴だと聞かされました。

ところが、甲斐嘉晃さん（現 京都大学フィールド科学教育研究センター）による遺伝子の研究で、メバルは遺伝的に全く交雑していない3種で構成されていることが明らかとなりました。もちろん、甲斐さんも能登に何度も足を運び、メバル類の標本を採集しました。そしてアカメバル、クロメバル、そしてシロメバルの3種に区別したのです。鰻目の漁師さんたちが区別していたくろばちめはクロメバルに、そしてしらたばちめはシロメバルに一致しました。ところが、シロメバルは浅い場所にも普通に生息していて、時には全身が茶色やこげ茶色になります。鰻目の漁師さん達や私はシロメバルの茶色っぽいものをあかばちめとして見ていたのです。詳細は本誌No.19をご参照ください。

再分類されたウミタナゴ

最後はウミタナゴです。魚類大図鑑ではウミタナゴ科にはウミタナゴ、アオタナゴ、そしてオキタナゴという3種類が紹介されています。ところが近年、片瀬弘志さん（現 環境生物研究所）らの研究により、ウミタナゴがさらに3タイプに識別できることが判りました。まず1タイプは日本海にも分布するウミタナゴ、後の2タイプは太平洋沿岸の関東以南だけに分布する

マタナゴとアカタナゴです。ただし、ウミタナゴとマタナゴは亜種あしゆの関係で、アカタナゴは別種です。幸いにも(?)、九十九湾周辺にはマタナゴとアカタナゴは分布していません。したがって、学名が少し変わっただけとなります。石川県にはウミタナゴとアオタナゴとオキタナゴの3種が分布していますが、九十九湾周辺で観察できるのはウミタナゴとアオタナゴの2種だけです。しかし、この2種の識別も見慣れないと難しく、鋭い観察力が必要です。

このように、図鑑というものは研究の進展とともに適用される和名や学名だけでなく、分布域や識別のための特徴が変わることが少なくありません。時代とともに、図鑑は変わり、使われる学名や和名も変わります。しかし、新しいものだけが正しいということもありません。長い間使われていなかった学名が有効な名前として復活することも少なくありません。どんな古い図鑑も捨てることなく、参照する必要があるのです。

また、ある魚の名前を図鑑で調べた時、図鑑で紹介されている特徴や色彩、斑紋などが実物の魚と一致するものが見つからなかった場合、もしかしたら新種かもしれません。しかし、複数の図鑑を調べることで、そして慎重しんちゆうになることが必要です。ここで紹介したイスズミやササノハベラ、メバル、そしてウミタナゴの研究は、いずれも京都大学の中坊徹次教授の指導により進められたものです。中坊先生ご自身、今でも多くの魚の分類や学名・和名の適用等に疑問を抱き、研究を進められています。科学の進歩とともに図鑑はもちろん、学校で使う教科書も変わることがあります。それを見つけるのは、あなたかも知れません。

(普及課長)



海岸付近で群れ泳ぐウミタナゴ

世界農業遺産認定の意義

谷内口 孝治

世界農業遺産の認定

今年6月、石川県の「能登の里山・里海」と新潟県の「トキと共生する佐渡の里山」が、世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems：GIAHS）に認定されました。GIAHSとは、次世代に継承すべき特徴的な農法や生物多様性などを持つ地域を保全する目的で、国連食糧農業機関（FAO）が2002年から認定を始めたものです。地域独自の生態系や、伝統文化、慣習など、該当地域の農業を営む上で重要かつ不可欠な諸要素を含めて、一定の「システム」として評価されます。これまで9カ国で8地域が認定されており、ここに新たに、日本、中国、インドの3カ国から4地域が加わりました。



写真1 砂浜で引かれる秋祭の曳山



写真2 揚げ浜式塩田作業

「システム」としての農業

GIAHSの特徴は、農法にとどまらず「システム」としての農業の考え方にあります。この考えは、わが国においてはかつての「農業基本法」にかわって1999年に施行された「食料・農業・農村基本法」が示す、農業の「多面的機能」に相通じるところがあります。農業は食料生産を行い利益を得ることを目的としていますが、生産活動を高めるため、空気や水、土壌などの環境を生産に最適なものに整えようとして、必要に応じて集落の共同作業を行っています。その多様な活動をとおして、農業は様々な機能を発揮していることがわかってきました。このような働きを「多面的機能」といいます。具体的には、たとえば、農地に降り注いだ雨水は保水されることで洪水防止につながります。また、農作業自体が生物多様性や自然環境の保全に役立ち、豊かな農村景観をつくりだします。収穫の祈りや感謝をあらわす祭礼（写真1）は、農村に繰り広げられる文化活動の伝承をも担っています。さらに、これは農業だけでなく林業や漁業においても同様ですが、レクリエーションの場を提供して森や海の生態系及び環境保全に効果を発揮しているのです。このような「多面的機能」を包含しそれぞれを要素と捉え、要素を関連づけて体系化したものが「システム」です。

評価された貴重な「システム」

「千枚田」や「あえのこと」、「揚げ浜式塩田」（写真2）、「海女の漁法」などが、能登で生業として行われてきた里山と里海の「遺産システム」を象徴する要素として挙げられています。これらは確かに、能登半島に見られる陸地と海の有効な利用形態として注目されるものです。しかし、能登に見られる「里山」と「里海」の活動は単独でのみ行われたのではなく、両者を上手く活かして深くつながりを持たせながら、能登に暮らす人々の支えとなってきたものです。そこに、能登が評価される貴重な「システム」があります。

たとえば、輪島塗の下地塗りでは、海底に堆

積した珪藻泥岩をもとに「地の粉」を作り、それを生漆に混ぜて塗布しています。また、能登瓦に用いる瓦粘土に「海水」を混ぜる方法や、海藻や魚を「肥料」に用いる方法、漁網に使うために太い縄（綱の子）を縫い、網で使用したあと稲わらの代用として壁土に混ぜ「木舞壁」の強度を高める方法など、いずれも海に囲まれた半島ならではの工夫が行われてきました。

歴史からみた能登

GIAHSの認定を受けた能登地域は、羽咋市以北の4市4町に及びます。まるで古代（712年に能登立国）から中世にかけ存在した「能登国」を彷彿とさせます。その当時、わが国と東北アジア、東アジア諸国との交流は、太平洋側より日本海側の方が盛んに行われていました。日本海を北上する対馬暖流に乗り、魚醬や鰺鮓、丸餅など、南の文化である「青潮文化」が広がって、交易の中心である「能登国」が最も輝いた時代であり、現在見られる農業や漁業の原型が出来上がった時代でもあるといえます。

近世に入ると「能登国」は「加賀国」に併合され、能登は徐々に僻遠の地となっていきます。加賀藩は塩の専売制を敷き、領民に米を前貸しし、生産された塩と引き換えする厳しい「塩手米制度」を行いました。塩作りの「浜土」は「目ぐされ」の伴う過酷な労働で、「砂取節」を労働哀歌として残しています。それでも、明治時代半ばまで、北海道の松前から大阪までの廻船交易が続いたため、能登が日本海交易の重要な位置にありました。しかし、時代が変わり動力船が走り、のちに物資の輸送が海路から陸路中心の時代に移行し、能登は表舞台から急速に消えていったのです。

農業の近代化

やがて、第二次大戦を経て昭和時代も1960年代になると、農業の近代化が叫ばれるようになりました。なかでも作目の選択的規模拡大と農作業の機械化が施策として行われ、化学肥料や農業が多く使用されました。米の増産のため干拓が進められ、多収穫を目的とする「耐肥性」の研究も化学肥料の多使用とマッチしたのです。また、重化学工業の発展や国土開発に伴い、若年層を中心に農家労働者が都市部に流れはじめ

ました。ちょうどこの頃から里山・里海の荒廃が始まり、今日に至っているのです。

これからの「能登の里山・里海」

現在では、アメリカを中心とするグローバルスタンダードが世界中をめぐり、規制緩和策の進行が止まず、環太平洋経済連携協定（TPP）がとりざたされています。しかも、能登では過疎・高齢化が顕著となってきている中での、GIAHS認定です。「能登の里山・里海」の伝統的なシステムをいかに守り、さらに発展させていくかが問われています。期待に応えるには、先人の叡智をもう一度見直し、生業としての一次産業を強化するとともに、地域の活力を高めていかなければなりません。そのためにも、これまで以上に足元に目をやり、眠っている多くの自然（写真3、4）や人、文化、歴史、産業、民族など様々な地域資源を掘り起こし、どのように活かすか、知恵を絞らなければなりません。GIAHS認定を弾みとして、持続可能な地域づくりが加速する能登の将来に大いなる期待がかかります。（館長）



写真3 広がるガラモ場



写真4 地下に眠る珪藻泥岩 (矢印: 珪藻泥岩)

トピックス

ふるさと石川環境保全功労者知事表彰

池森 貴彦

2011年（平成23年）6月28日に、平成23年度ふるさと石川環境保全功労者知事表彰式が、石川県庁特別会議室で行われ、今回、のとスノーケリング研究会「海もぐら」前会長の和田巖さんが表彰される快挙となりました。

この表彰は、ふるさと石川の環境を守り育てる活動に率先して取り組み、その成果が顕著で他の模範となる個人や団体が表彰されるものです。

のとスノーケリング研究会「海もぐら」はスノーケリングの進歩普及を図り、楽しく海に親しみ、併せて会員相互の連絡並びに親睦を図ることを目的として、平成14年に結成された任意団体です。当センターのスノーケリング活動では、メンバーの方々に指導者として参加していただいています。スノーケリング活動は、海もぐらのメンバーの協力なしにはとても実施できません。

和田さんはその海もぐらの結成当初からの主力メンバーです。そして、スノーケリング視察会や、当センターで実施しているスノーケリング活動に指導者として積極的に参加されています。和田さんの表彰により、「海もぐら」の活動そのものも高く評価されたと感じ、嬉しく思います。（専門員）



表彰を受けた和田巖さん（左）と谷本正憲知事（右）

展示水槽「加温冷却ユニット」とヤドカリ号エンジンの交換

東出 幸真

平成6年4月の開館から17年が経過し、展示水槽の「加温冷却ユニット」や、調査研究船ヤドカリ号のエンジンの修理部品がなくなってしまう、修理不能の状態におちいってしまったので新しい製品と交換することになりました。

まず「加温冷却ユニット」は、タッチプール、拡大水槽、生態水槽等の展示水槽の海水環境を一定



ヤドカリ号の新エンジン

に保つための装置です。今回は冷凍機と海水循環ポンプ、コントローラーを交換しました。冷凍機に使用されている冷媒のフロンは、オゾン層を傷めないタイプのものに変わりました。

次にヤドカリ号は、乗船定員6名のFRP製の小型のボートです。毎月中旬に行う九十九湾水質調査や体験活動時の安全管理等のために活躍しています。エンジンは船外機と呼ばれる船尾に固定して使用するタイプで、これまで2ストロークの3気筒エンジンを使用してきました。これを新しく4ストロークの4気筒エンジンに交換しました。エンジンは少し重くなるものの、排気ガスに燃え切らなかったオイルが混じらないことや燃費が良いのが利点です。

新しくなったヤドカリ号のエンジンと加温冷却ユニットの冷凍機は、いずれもこれまでのものより少し地球環境にやさしい製品です。（専門員）

穴水町新崎での里海の取組み

池森 貴彦

当センターでは2009年（平成21年）から2年間、七尾湾で海岸動植物のモニタリング調査を実施しました。七尾湾は石川県の北東部に位置する湾で、中央部に能登島があり、北部を北湾、南西部を西湾、南部を南湾と区分されています。その調査は北湾、西湾、南湾そして湾口部にそれぞれ調査点を設けて、海面付近から約0.5mの深さまでに生息する動植物の生息量を、種別に4段階（多い、よく見つかる、探せば見つかる、よく探したが見つからない）に分けて記録するというものでした。

2009年は主に自然海岸で、2010年は隣接する自然海岸と人工海岸を比較することに重点を置いて調査を実施しました。動物と植物の種組成から、湾口部付近と北湾を主体とした開放的で潮通しの良い地点と、西湾や南湾の内湾部の地点を主体とした閉鎖的で潮通しの悪い地点の2つに区分されました。内湾部の地点では自然海岸も、それに続く人工海岸も動植物の種類数が少ない傾向が見られました。また、人工海岸であっても、近くに動植物の種類数が多い自然海岸があり、自然石でスロープを作るなど潮間帯を広げるような工夫をしてある海岸は種類数が多いことが分かりました。

穴水町の新崎海岸は、北湾の湾奥に位置しますが、北湾は湾口部が広いので比較的潮通しが良く、自然海岸では岬がありその西側に遮蔽部が、そして大小転石の場所もあるなど、海岸の環境は変化に富んでいます。そのおかげで動物植物ともに種

類数は調査地点の中では多かったです。続く人工海岸は、表面に起伏のある積ブロック護岸があり、他の人工海岸より動植物の種類数は多かったのですが、漁港の堤防は垂直護岸で種類数は少ない状況でした。

「この辺は昔なまこのたくさんとれる海だったが、今はあまりとれなくなってしまった。何か自分たちで改善する手立てはないだろうか。」と、地元の新崎・志ヶ浦地区里海里山推進協議会の代表者の岩田さんから相談を受けました。そこで私たちは、この調査結果から垂直護岸のすぐ海側に人力で自然石を投入し、スロープ状にすることを提案しました。なまこは夏の水温の高い時期は活動せず、石の隙間に入り込んで冬眠ならぬ「夏眠」するため、投入した石はなまこの夏眠場所となることをお話すると、ぜひやろうと賛同してくださいました。今年の3月27日に、小規模ですが自然石が投入され、取り組みが開始されました。私たちは石の投入には立ち会えませんでした。6月に石の投入場所に生息する動植物の調査を行い、見事小さいなまこが石の隙間に生息していることを確認しました。この取り組みは今後も続けられるそうです。

私たちも、生息する動植物の種類がどう変化するかなど、追跡調査を続けることで協力していきたいと思います。これこそ里海を守る取り組みの1つといえるのではないのでしょうか。

（専門員）



写真1 穴水町新崎の人工海岸に投入された自然石



写真2 自然石の裏で見つかったマナマコ

セ ン タ ー 誌 抄

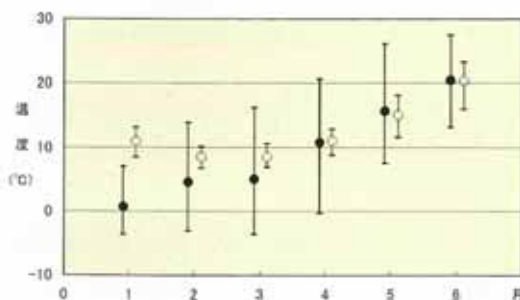
2011 (平成23) 年 前期 (1~6月)

- 1/15 ヤドカリ学級「海の生きものの誕生をみよう!」を開催3名参加
1/30 金沢港にパナマ船籍の貨物船が座礁、燃料油が流出し、2月2日には羽咋市千里浜や宝達志水町今浜への油の漂着が報道された。2月3日に現地調査を実施。漂着油による動植物の被害は軽微であると判断された。
1/31 石川県地球温暖化対策等推進基金事業「のど海洋ふれあいセンター省エネ改修工事(太陽光発電パネルの設置、展示室等のハロゲン電球をLED照明に交換)が完了
2/12 金沢大学「能登里山マイスター」養成プログラム受講生の20名が実習と施設見学のため来館
2/19 ヤドカリ学級「食べられる海藻をみよう!」を開催11名参加
3/6 平成22年度 海のまなび舎講座「石川の自然談話会」を開催5名参加。テーマは「奥能登に迫りくるイノシシなど大型哺乳類の現状と対策」、講師は石川県白山自然保護センター研究主幹 林智氏
3/11 東日本大震災で発生した津波が夕方に石川能登に到達、津波警報が発令されたが実質的な被害はなかった
3/12 ヤドカリ学級「塩の結晶づくり」を開催2名参加
3/17 総合消防訓練を実施
3/25 のど海洋ふれあいセンターだより「能登の海中林第34号」発行のど海洋ふれあいセンター研究報告 第16号発行
3/29 日本藻類学会第35回大会が富山大学(富山市)で開催され、エクスカーション参加の16名が磯採集のために来館
3/30 海藻おしぼ協会の野田三千代会長が海藻採集のために来館
ヤドカリ学級「春の磯をみよう!」を開催5名参加
4/21 砂浜海岸における底生動物モニタリング調査を実施
4/30 ヤドカリ学級「春の海あそび!海藻とあめふらし」を開催18名参加
5/11 石川県親友会七尾鹿島支部主催の探鳥会が七尾市立北星小学校(七尾市鶴浦町)で開催され、講師として東出幸真専門員を派遣
5/13 NHK金沢放送局「のど自然だより」が放送され、池森専門員が九十九湾の春の海を紹介
5/21 ヤドカリ学級「磯でおいしいしただめをみよう!」を開催12名参加
6/1-16 岩礁海岸モニタリング調査を実施
6/18 金沢大学地域連携推進センター「里山里海アクティビティ」主催による「里海体験実習in能登半島」の参加者17名が海の体験実習のため来館。講師として坂井恵一普及課長を派遣
ヤドカリ学級「本当はちがう!!海藻と海草」を開催15名参加
6/23 NHK金沢放送局「のど自然だより」が放送され、東出専門員が高松海岸のシギ・チドリ類の飛来とエサ動物等を紹介
6/24 ヤドカリ号の船外機取り替え、空調機の修繕、及び展示本槽の熱交換器等の交換工事が完了
6/25-26 スノーケリング指導者研修会を開催9名参加 能登消防署による普通救命講習受講

観 察 路 だ よ り

今年の冬は久しぶりに冬らしい冬でした。正月三ヶ日は雪もなく、平穏に過ごせたのですが、その後は一転、次々に寒気団の襲来がありました。まとまった積雪は1月中旬に一回だけでしたが、低温の日が続き、最高気温が氷点下の真冬日が1月だけで9日間もありました。また、4月上旬まで寒気団の南下がありました。左図からも1月の気温が特に低かったこと、そして4月にも最低気温が氷点下を記録したことが読み取れると思います。

今年の大きな出来事の一つに、NHK金沢放送局が企画した「のど自然だより」の放送が挙げられます。まず、当センターの普及課職員が石川の海に係る生きものたちの営みをハイビジョンカメラで撮影し、それをNHKの専門職員が約5分間の映像に編集します。その映像を午後6時10分から放送の“かがのどイブニング”で、当センターの職員が電話回線を使って直接(ライブ)解説するという試みです。これまでに3回の放送がありました。まず5月は池森専門員が担当し、海藻類が最も繁茂した春の磯の海中景観とアメフラシの特徴等を紹介しました。6月は東出専門員が高松海岸で観察できるシギ・チドリ類とその渡り鳥たちの重要なエサとなっているナミノリソコエビを紹介しました。8月は私が担当し、スノーケリングで直接見ることのできる九十九湾の夏の海中景観、そして海岸近くの森で暮らすアカテガニの特徴とその観察会の様子を紹介しました。来年3月までにあと2回程度の放送が予定されています。スタッフ全員張り切って、でも楽しみながら取り組むことにしています。(K.S)



2011年1月から6月の気温と水温の月別変化

気温：午前9時に観測した月別平均値(●)
実線は月別の最高・最低気温の範囲を示す
水温：午前9時に観測した月別平均値(○)
破線は月別の最高・最低水温の範囲を示す

のど海洋ふれあいセンターだより「能登の海中林」
通巻第35号 平成23年10月28日発行
編集発行 のど海洋ふれあいセンター
住所 石川県鳳珠郡能登町字越坂3-47 (〒927-0552)
TEL 0768(74)1919(代): FAX 0768(74)1920
URL: <http://notomarine.jp/>
E-mail: nmci@notomarine.jp

のど海洋ふれあいセンター

設置者：石川県(環境部自然環境課) 指定管理者：(財)石川県県民ふれあい公社
入場料：個人は高校生以上200円、団体(20名以上)160円、中学生以下は無料
開館時間：午前9時～午後5時(但し、入館は午後4時30分まで)
休館日：毎週月曜日(国民の祝日を除く)と年末年始(12月29日～1月3日)



この印刷物は、印刷後の紙へリサイクルできます。



環境に配慮した「植物インク」を使用しています。